

平成29年度 英語が好きになる学校づくり事業 取組報告書

事務所名	宮古	学校名	田野畑村立田野畑中学校	TEL	0194-34-2301
------	----	-----	-------------	-----	--------------

生徒の英語に対する興味・関心を高める教室・学校環境づくりと
生徒が達成感を感じられるような英語指導の工夫

【ねらい】

1 英語学習やコミュニケーション活動への苦手意識の軽減

英語の授業改善と、学校全体としての環境づくりを通して、英語学習に対する生徒の興味・関心を高め、コミュニケーション能力の向上と学力向上につなげる。

2 基礎・基本の定着、語彙力の育成

授業の帯活動、授業外の時間の「国際理解コーナー」での活動、家庭学習の取り組み方の見直し等により、英語力の土台となる語彙、基礎・基本的な構造等を確実に定着させる。

3 小中連携を通じた全教員のかかわりを意識したすべての教科の授業改善

小中の全職員でチームを作り、相互授業参観・研究会を行うことにより、英語と外国語活動だけではなく、全職員・全科目において自分の授業を振り返り、授業力向上を目指す。

【具体的な取組】

1 英語の授業改善

(1) ゴールまでの見通しと振り返りを意識した授業展開

単元としてのゴール、各単位時間の中でのゴールをまずは教師が明確に把握し、生徒につけさせたい力を Can Do List で再確認しながら、授業構想するよう努めてきた。ただし、まだ準備不足のまま授業に入ってしまうこともあるため、今後の継続課題である。

(2) 帯活動の工夫

基本的な文法や語句を定着させるため、帯活動では主にインプット系の活動を組み入れている。毎時間継続的に繰り返すことの効果について試行しながらではあるが、ALT の協力も得ながら継続している。短時間の活動ではあるが、これについても「何のために」という意識を生徒にも持たせながら活動させることが重要と捉え実践している。

(3) 英語を用いた「やり取り」を目指す活動の導入

自然なやり取りを行わせるためには、丸暗記した文と内容ではなく、個々の生徒に生じた考えを必然性のある場面の中で日常的に積み重ねていく必要がある。導入場面や補助資料等を工夫することにより、各単元で扱う言語材料と内容を味付けし、より「聞きたい」「話したい」「読みたい」「書きたい」と思えるような学習課題、Topic の提示を心掛ける。

(4) 「小さな成功体験」を積み重ねることができる課題・活動の組み立て

1学期に行ったアンケートでは、各学年ともに「英語の授業が好き」「どちらかというと好きな方だ」という肯定的な回答が50%程度という結果であった。否定的な回答をした生徒の理由としては、「難しい」「覚えられない」「必要性を感じない」等が挙げられてた。

英語学習に対する生徒の抵抗感を少しでも緩和するために、与える課題・活動を生徒の実態に応じ、実

際に取り組めるレベルまでかみ砕いた上で提示するよう意識した。個々の課題を解決できた時の教師からの評価はまだまだ十分なものではないが、今後も継続の必要性を感じている。

(5) TT の役割分担

本村には常駐の ALT が中学校を拠点校として勤務しており、7～8割の英語の授業を TT で行うことが可能な環境である。主な役割としては、音声指導、導入場面での活用、概要・内容把握の場面での Q&A 等である。ALT に内容構成を任せ、異文化紹介等の時間も、学期に 2～3 度実施してきた。

ALT の勤務も 2 年目となり、生徒も大分馴染んできているため、今後は「自然なやりとり」の部分で、同じ空間にネイティブがいる利点を生かした活用を工夫していく必要を感じている。

2 英語に親しむ全校的な環境づくり

(1) 昼食・清掃時の A T L との英会話

村常駐の ALT が各学級の給食・清掃時間共に活動し、日々の生活の中での英語に触れる機会となっている。給食時にはスタンプカードも導入し、意欲につなげている。

(2) 昼の放送時での英語番組の放送

生徒会情報委員会による昼の放送に英語関連のものを取り入れた。音楽や童話などを中心に、必要がある時には和訳付きの英文も配布。

(3) “Hello World”（国際理解コーナー）の設置

ICT 支援員の協力を得ながら、映画や音楽、タイピングゲーム等のサイトを利用して英語に触れ合うことができるスペースを設置。主に昼休みに興味をもった生徒が集まり、各々の時間を過ごしている。タイピングゲームでは教員も加わり、常時ランキングも表示している。

その他にも英語の書籍（コミックも含む）や、ALT によるアメリカの行事や文化の紹介、また日常会話の例文等も掲示している。

参 考 本校で利用しているサイト

◎ 洋画や洋楽、有名人のスピーチなどのタイピング練習

<https://lyricstraining.com/>

<https://www.timeforkids.com/>

<https://www.e-typing.ne.jp/english/>

◎ タイピングゲーム（中学生用の単語を登録すると使いやすくなります）

<http://zty.pe/>

(4) 村の補助事業としての英語教育

① 米国派遣研修

震災で一時期中断していた事業を 2 年前から再開。盛岡市のアールム大学との交流事業に合流し、盛岡市の中高生と一緒に生徒 3 名、教員 1 名をインディアナ州に派遣している。

② 実用英語検定受検補助

全校生徒対象に年 1 回分の受験料とテキスト代を補助。

3 校内研究の視点から

本校研究主題「主体的に行動できるたのはたっ子の育成」

～かかわりを意識した授業づくりを通して（伝えあい・認めあい・高めあう）～

(1) 生徒の実態と研究の方向性

本校の生徒の特長として素直に物事に取り組もうとする姿勢や、将来の夢をもっている生徒が多いということがあげられる。その反面、自己肯定感の低さ、コミュニケーションに消極的という課題も指摘されている。今まで積み重ねてきた小中連携教育の土壌を生かしながら小中全教員が授業改善に取り組むことで育てていくことを目指している。

～小中連携で確認している授業改善のポイント～

- ① 「いわての授業づくり3つの視点」を基本とする授業づくり
- ② 「生徒指導の3機能」を生かした授業づくり
- ③ 「かかわり」を意識した授業づくり

(2) 「かかわり」について

授業中の「かかわり」を単なるグループ学習やペア学習という形態としてとらえるのではなく、生徒同士のかかわり、教師と生徒とのかかわり、学習材と生徒とのかかわり等を通し、個の学びがさらに深まり広がっていく大切な「場面」としてとらえ、授業実践を行っている。

(3) 小中連携による授業改善の取り組み

生徒・児童の学力向上、健全育成のために、小中の接続を意識しながら学習・生活指導を続けている。今年度からは特に「授業改善」を柱に据え、小規模校の課題である授業に対しての多様な意見交換の場を年度計画に位置付け、研究会を重ねている。小中の教員を教科別の3グループに分け、全員が1度は研究授業を行い、最低限同グループの教員は研究会に参加することを原則としている。また、各グループで1～2名は小中合同の全体研を行うこととした。

特に中学校としてはほとんどの教科担当が1人であるため、教科部会に代わるものとしてとても有効であるにとらえている。

今年度の小中連携授業研究グループ（太字全体研）

Aグループ（6名）	Bグループ（6名）	Cグループ（9名）
小・国語（3名）	小・算数（2名）	小・社会（1名）
中・国語（1名）	中・数学（2名）	中・社会（1名）
小・理科（1名）	小・音楽（1名）	小・保体（3名）
中・理科（1名）	中・音楽（1名）	中・保体（2名）
		小・外語（1名）
		中・英語（1名）
		※保体は養教含む

(4) ICT機器の活用

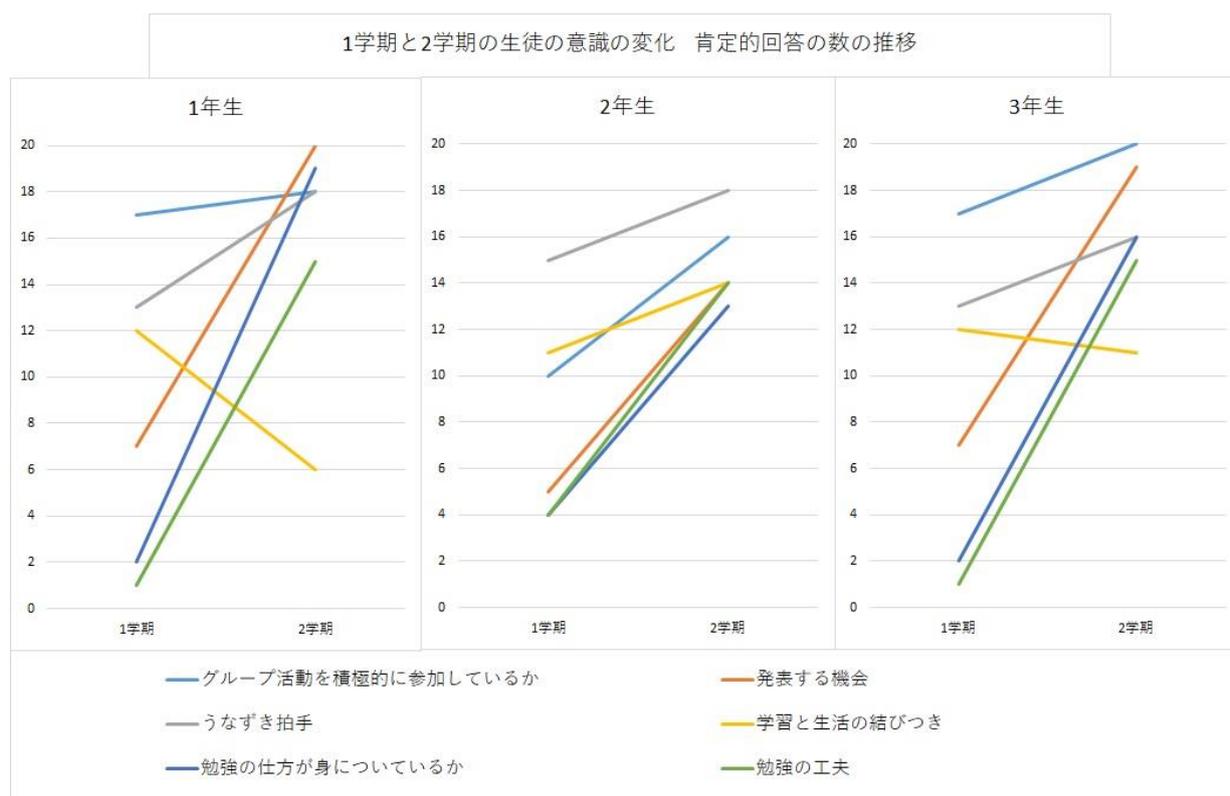
本村では昨年度から学校ICT環境の整備を進めている。ハード面については今年度導入がほぼ完了し、今後はソフト面、授業にどのように活用していくのかを試行している段階である。小中兼務のICT支援員の配置もあり、現在は調べ学習や画像・映像の投影、生徒の活動の撮影等で活用している。

まずは全職員が使えるようになることを目標としている段階であるが、今後は活用のねらいを明確にし、「活用すること」自体が目的とならないよう留意していくことが必要である。

【成果】

1 コミュニケーション活動に対する意識の変化

研究部で実施した生徒意識調査結果



1学期と2学期の全教科の授業に対する生徒の回答である。英語学習については残念ながらまだ目に見える成果が表れていないのが現状であるが、教科全体で見るとコミュニケーションに対する生徒のモチベーションの部分でプラス面の変化が見られる。実践を継続しながら今後のさらなる変化を期待していく。

2 英語に親しむ環境づくり

今回の「英語が好きになる学校づくり」の取り組みにより、自然に職員室内で「英語が好きになる」ための様々なアイデアが交わされていたことも大きな成果としてとらえている。

既存の「視聴覚コーナー」を意識的に“Hello World”（国際理解コーナー）と名付け、英語科以外の職員にも協力してもらい、昼休みには特別な活動がない限り、生徒が良く集まる場所になりつつある。ランキングを取り入れた活動では、英語が嫌いとして調査に記入した男子が一生懸命タイピングに励む姿が見られたり、ゲームとは無縁な女子が、ランキングで男子に負けたくないからと意欲をもって取り組む姿が見られたりした。生徒会も巻き込んだことで、多くの生徒や教職員がかかわるきっかけにもなり、今後の活動につながる流れを作ることができた。

3 小学校外国語活動との連携

小中連携教育を軸に研究・実践を続けてきているが、今回の取り組みをきっかけに、小学校外国語活動と中学校の英語の連携を今までよりも強化することができた。ALTは小中兼務として授業に参加していたが、昨年までは小中のJTE同士の交流の機会は年間を通して少なく、中学教員が3学期に小学校を訪問し、6年生に授業を行う程度であった。

校内外の方々から様々な指導をいただきながら、日常の小中相互の授業実践に触れ、考え、自分の授業と児童生徒の様子を見つめ直すことができたことが大きな財産であったととらえている。